

角田市を流れる阿武隈川の河川敷。一見、ほんらん原のような地面を一本の滑走路が走る。「角田滑空場」だ。グライダーが砂煙をまとうように浮き上がり、流線型のシルエットとなつて青空に吸い込まれる。その優雅な飛行、ふりは、見ているだけで心が浮き立つ。



この河川敷が滑空場として使用され始めたのは一九九八年ごろ。グライダーの愛好者らでつくる県航空協会が、国の使用許可を受け活動の拠点を選んだ。「グライダーをまぢおこしの起爆剤に」という角田市内の若手商人らの支援もあって、市民にもその存在が広く知られるようになった。

格納庫などの施設類こそないが、直線で一・二キロ(うち舗装部分約四百五十メートル)、最

角田

① 角田滑空場

メモ グライダーの愛好者は全国で約五〇〇〇人いるとされ、愛好者、競技団体で所有する機体は計五〇〇機ほど。県内では県航空協会所属の九機があり、メンバーは約一〇〇人。同協会によると東北地方でグライダーが飛行できる民間施設は、角田市のほか秋田市の秋田大滑空場、福島市の農道空港だけという。

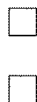
大幅三十度の「滑走路」はグライダー飛行には十分。航空協会角田支所長の斎藤岳志さん(三三)「角田市」は「霧の発生が少なく、安定した上昇気流が見込めるなど環境面は抜群。競技関係者から全国大会誘致を持ちかけられるなど、県外でも高い評価を受けてい

空に近いまちPR

る」と話す。

県内では従来、仙台市の陸上自衛隊霞目飛行場が民間に開放されていたが、利用は週末に限られていた。加えて、二〇〇一年九月の米中枢同時テロに伴う警備強化で民間利用が一時制限されたこともあり、制約の少ない角田滑空場が愛好者から熱い視線を注がれることになったという。

昨年五月には角田市商工会青年部などの協力で「角田スカイスポーツフェスティバル」を開催。ジャイロコプターやラジコン飛行機も登場し、滑空場を舞台に体験搭乗やデモンストレーション飛行など「空の祭り」を市民らが楽しんだ。



市商工会青年部の目黒博之部長(三九)は「グライダーのまちとして定着すればイメージ

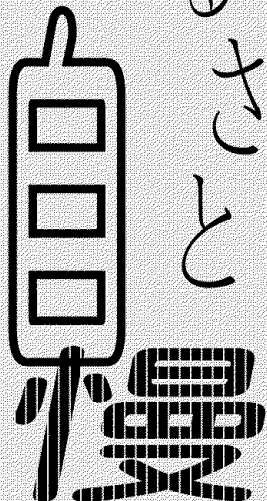
アップにもつながるはず。角田をスカイスポーツの拠点にしたい」と意気込みを見せる。「将来的には機体を購入し、市民参加でスカイスポーツの選手を育成できるようなクラブにしたい」と話すのは発起人の一人、佐藤忠義さん(四二)。

現在は目黒部長ら市民有志が発起人となり、「角田市航空協会スカイネット」の組織づくりを急いでいる。市民を交えて航空関係の情報発信を進めるほか、クラブハウス、格納庫などを備えた「航空公



河川敷に延びた滑空場に集まる各種のグライダー。「スカイスポーツの拠点に」と地元関係者も注目している＝昨年9月、角田市佐倉の阿武隈川河川敷

発掘・創出



ふるさと

慢